

トヨタ財団
広報誌[ジョイント]
January 2026

No.50

【特集】LIFE：まもる／守る／護る
働き／働く

創刊から通算50号目を迎えた今号。特集のテーマは「働く」。この社会に生きるわたしたちは「働き」から何を得て、何をまもるべきなのか。働くことの多様性と個人の生き方の問題を考えます。



JOINT January 2026 No.50



Photo by Yoko Niide

今号の表紙は午年にちなみ、助成対象者の方からフィリピンのお土産としていただいた馬の置物です。これはラグナ州パエテ町発祥の伝統的な紙粘土（張り子）工芸「TAKA」というもので、地域の住民、特にこの民俗芸術に専門に携わる女性たちにとって重要な暮らしの糧となっているそうです。本作品のテーマは「パエテ町における家族の集い」とのことです。

CONTENTS

FIRST WORD ● 犬塚 力
新年のご挨拶 2

【特集】LIFE: まもる／守る／護る
働き／働く

助成対象者鼎談 辻岡秀夫 × 中野祥子 × 野村 駿

ワークとライフのバランスをどうとるか 4

私たちの取り組み——助成対象者からの寄稿

国際助成プログラム ● 東 恵子

日韓のダブルケア支援プロジェクトを通して 12

研究助成プログラム ● 下向依梨

ウェルビーイングな学校と地域を育むために 14

国内助成プログラム ● 築瀬健二、尼野千絵、尼野三絵、馬崎 慧

人と人の新たな繋がりが、これからの自治を支えていく 16

中間報告会・合同ワークショップ・レポート ● 寺田 俊

共有から育まれる未来 18

ワークショップ・レポート ● 寺崎陽子

想像力で未来をひらく 20

「私」のまなざし ㊦ 宮原克典

身体性から見る人間とAIの相違点 22

トヨタ財団ジャーナル

カイケツ Next 【入門編】in 北海道 ほか 24



公益財団法人トヨタ財団会長

犬塚 力（いぬづか・りき）

この度、小平信因前会長の後を受けて、トヨタ財団会長に就任いたしました犬塚力です。1974年に設立された当財団が設立50周年を迎え、次の50年間に向けて歩みを始める、まさにその年に就任したことを光栄に存じます。皆さまには平素よりトヨタ財団へ多大なるご支援、ご指導を賜り、厚く御礼申し上げます。

私は1982年にトヨタ自動車に入社した後、北米での勤務を挟み、商品企画や人事、経営企画等の分野を経験してきました。2015年からはトヨタファイナンシャルサービス、2019年からは中部国際空港の社長をそれぞれ務めてまいりました。現在はトヨタ財団に加え、名古屋フィルハーモニー交響楽団の理事長も兼務しています。また、2019年にはNPO法人「SCIFORUM(Sustainable Co-Innovation Forum)」を立ち上げ、その代表理事も務めております。このように営利企業と非営利団体の双方でキャリアを積む中で、両者の違いを超えて共通する重要な点に気づかされました。

一つ目は、「組織は何のために存在するか」という点です。トヨタでの経験を通じ、私は「企業の最大使命は社会課題の解決」であると学びました。トヨタの歴史を振り返ってみれば、自動織機の発明、日本における自前の自動車産業の立ち上げ、環境に優しいハイブリッドカーやFCVの発売と普及など、正に課題解決の歴史そのものです。もちろん営利企業である以上、利益の獲得は不可欠ですが、社会課題に正面から向き合い、組織一丸となって解決に尽力し、その結果として利益を得るという順番を間違えてはなりません。この点は、営利企業も財団やNPO等の非営利団体も、目指すべき本質は共通しています。

二つ目は、組織を動かし、社会を動かすには「高い志と情熱」が欠かせないという点です。トヨタ在籍時、私は孤独死や不登校、若者支援、途上国支援、地場産業の活性化といった課題に献身的に取り組む方々を多く知ることができました。その志と情熱には、心が震えるほど感動しました。今後さらに求められるのは、同じ志を持つ営利企業と非営利団体が手を取り合い、共通の課題解決に取り組むことだと思えます。更には行政を巻き込んでいくことも欠かせません。こうした協働・共創こそが、社会全体にイン

パクトを与え、より良い方向へ動かしていくと信じています。

近年の世界情勢を見れば、変化の激しさと速度には驚かざるを得ません。デジタル化や生成AIの進化、人口動態や国際環境の変化、気候変動、更にはコロナのような世界的な感染症の拡大などから生まれてきた新たなエネルギーに対し、これまでの社会構造が応えきれなくなっているのは明らかです。次なる社会の骨格がどうあるべきか、さまざまな議論がありますが、トヨタ財団としても助成活動を通じて、新たな社会作りの鍵となる成果や好事例を創出し、発信したいと考えます。そのためにも、社会課題解決のための高い志と情熱を持った多くの人たちが、さらに積極的に当財団へ応募してくる、そして助成を受けるといった流れを加速させていきたいものです。

トヨタ財団の次の50年への歩みに対し、皆さまの厳しくも温かなご指導、ご鞭撻をいただければ幸いです。



ワークとライフのバランスをどうとるか

Tsujioka Hideo

Nakano Sachiko

Nomura Hayao

辻岡秀夫 × 中野祥子 × 野村 駿

ファシリテーター ● 武藤良太(プログラムオフィサー)

野村 秋田大学の野村です。プロジェクトメンバーは、学校や企業で調査をしてきた4名の研究者に加えて、実務家教員(元教員)3名にも入っていただき、学校を一つの組織として見たときに、それぞれの学校の働き方、先生方の働き方がどう違うのかといったところに重点を置いて一緒に調査をしています。教師の多忙問題にどう切り込めるかという点に関心があります。

しかし、僕は教師の研究を長年やってきたわけではありません。もともとは「夢追いバンドマン」の研究をしていました。普段やっているのはライブハウスなどに行って、「俺は音楽で生きてくんない」と言っている若者に、なぜそう思うようになったの？ということを知りたい、彼らがその後どうなっていくのかを追跡調査したりしてきました(野村駿、2023『夢と生きる バンドマンの社会学』岩波書店)。

教師の研究をやり始めたのは、大学院生のときに中学校の先生の働き方の問題に共同研究で関わらせていただいたのがきっかけでした(内田良・上地香杜・加藤一晃・野村駿・太田知彩、2018『調査報告 学校の部活動と働き方改革——教師の意識と実態から考える「岩波ブックレット」』)。なので、もともと若者の働き方、いわゆるサラリーマンのような雇用労働者ではない選択をした人たちがどういうライフコースを歩んでいくのかという研

三者三様の立場と活動

2025年度のJOINTの通年テーマは「LIFE：まもる／守る／護る」です。この言葉には、弱い立場にある人を支えたり、これまで持っていたものが失われたりしないようにするだけでなく、多様な人や社会が力を発揮できる環境をまもり、望む未来を創っていくという積極的な意味も込められています。

第3回は、「働き／働く」に着眼し、それぞれに異なる立場や視点から取り組みを進められている3名の助成対象者の方にお集まりいただき、助成対象となったプロジェクトに限らず、ご自身のキャリアやライフステージなどからの問題意識や思いも含めて率直に語り合っていました。

2025年は「ワーク・ライフ・バランス」という言葉に改めて注目や関心が集まりましたが、期せずして、今回の鼎談でもこの言葉に触れる場面がありました。「働き」や「働く」は非常に広範でさまざまなものが含まれてくるからこそ、何か一つの正解を求めたり特定の姿に縛られたりするのではなく、「働くこと」に対する一人ひとりの価値観や在り方が尊重された上で、「働き方」などの社会の仕組みもより熟度が増していくことの大事さも皆さんのお話から多分に窺えました。

今回の鼎談は、結果として過去2回と比較して今年度の通年テーマへの直接的な言及は薄まりましたが、多様な問かけや示唆を含む内容となっています。是非ご一読ください。

【特集】

LIFE

まもる／守る／護る

働き／働く





●野村 駿(のむら・はやお)

秋田大学 教職課程・キャリア支援センター講師。2023年度 イニシアティブプログラム「学校現場とともに進める働き方改革に関する実践的・実証的研究」代表者

究をずっとやっていく中で、それを教師の働き方の話に置き換えて、働きすぎという問題が何によって起因するのか、何によって変化するかということ进行を明らかにして、それを現場に還元していきたいと考えています。これまでやってきたことと現在していることは異なりますが、「働き方」に関心があるという点では共通しています。

中野 私の専門は異文化間心理学で、博士号は文化科学です。現在は山口大学の留学生センターというところで講師をしており、留学生に対して日本語教育をしています。また、最近新しい大学院ができてまして、その修士課程で異文化間心理学を教えています。

プロジェクト」というものがあります。これはひきこもりの若者が、サポーターとよばれるスタッフとともに地域の団体や企業、また個人の困り事を有償で解決する取り組みです。若者の「力になりたい」という想いと地域の「助けてほしい」という想いをマッチングさせることで、若者が地域の担い手になることやその体験を通して社会参加の形を自分なりに見つけてもらうことを目指しています。

トヨタ財団の助成で行った調査から、若者が提供できることと地域が解決したいと思っている課題が合致していることがわかりました。また、活動を行うにあたって依頼主とのコミュニケーションの部分に不安がある若者が多いということもわかったので、両課題が解決、カバーできるような形でこのプロジェクトを始めました。

このプロジェクトはワークを体験したひきこもりの若者が自分も社会に出られるかもしれないと思いい挑戦する後押しになりますし、もし難しくて戻ってきたても自分のペースで再挑戦できるようなフォローの仕組みを考えて実施しています。

ここに相談に来られる方々は職場や学校に所属していない、でもコンビニには行けたり、趣味の集まりのサークル活動には入っているというような人から、もう何年も自分の部屋から出られない方もいらっしゃるの、状態の幅は広いといえます。以前はいじめなどがきっかけで不登校になって学校に行けなくなり、そのまま家に留まり続ける人が多かった

研究や社会活動としては、外国人の日本語教育、日本人に向けてのやさしい日本語の指導、それから外国人介護職の人たちに向けた方言研修をしています。インドネシアやフィリピンの技能実習生が介護職についているケースが多いのですが、山口は山口弁が結構きついで、日本語N4レベルで入ってきた実習生たちでも、実際は全然言葉が通じなくて心が折れてしまうことがよくあるので、それをどうにかしたいと考えています。お年寄りの音声を録音して、その言葉を教えて、実際に対面して話すという、対面を介した異世代間交流かつ異文化間交流プラス日本語教育をしています。方言を使いこなせるようにすることが目標ではなくて、まずはお年寄りを怖がらないとか、方言があるけれどもなんとか会話になったといった成功体験を積み上げてもらって、居場所を作ることを目標にしたプログラムを動かしています。それから日本にいた留学生や技能実習生たちが母国に帰った後に日本語の能力を維持するお手伝いもしています。

外国人材と一言で言っても、いわゆるホワイトカラーの人たちと、特定技能や技能実習生の方たちとは思考が全然違っています。前者は残業はしたくないと思っていますが、基本的に技能実習の皆さんは収入のために残業して働きたいんです。残業がない会社は収入につながらないので人気がなく、そのような会社は「ホワイト」だからというのが転職

のですが、最近の調査によると、学校を出て仕事をして、そこで挫折して再就職するところに至らず、家に留まり続ける人が増えていることが分かっています。

ひきこもりの若者たちが、わらしべの活動を通じて出会った地域の人たちと一緒にご飯を食べているときに、ある男性が「俺、企業の人事担当でいろんな人を採用してるんだよ」と言ったことがあります。そういう人ともわらしべの活動を通してだと仲良くできますが、自分が就職の面接を受ける企業の人事担当者考えると、別の世界に生きていて自分に審判を下す人のようなイメージがあるので、明らかにその人の見え方が違ってきました。そこを崩していきたいと思い、その人事担当の男性の失敗話など等身大の話題を聞いたりすることによって、同じ人間なんだなと感じてもらえるようなこともありました。結局、その人の能力やポテンシャルだけではなく、その人が社会をどう捉えるか、その見え方・考え方で世界の見え方や生活は変わると思っています。

働くことにおける平等とは

野村 中野先生のご説明に特定技能の人たちと専門職で来ている人たちの思考が違っているお話がありましたが、プロジェクトメンバーに企業の雇用労働の研究をしている人が入ってくださったおかげで、僕らの研究もいろいろ

の理由になります。韓国は日本に比べると残業し放題の企業が多いので、人材が韓国に流れていつていると聞きます。「働く」といった時に何を指して働いているか。賃金なのか、生涯設計なのかみたいなところで、ずいぶん視点が違うんだなというのは、この研究を始めてから衝撃を受けたことの一つです。

助成プロジェクトでは、在日外国人のための異文化間防災研修プログラムを作成します。外国人雇用企業への防災BCPの構築と実践ということなのですが、BCPとは災害や事故、パンデミックなどの緊急事態が発生したときに、企業が事業を中断することなく、できるだけ早く通常業務を再開できるようにするための計画で、それを外国人用にするというのが主な目的です。近い将来大きな地震、特に首都直下と南海トラフが発生すると言われています。外国人材は中小企業にとつてはもう欠かせない戦力となっており、製造業では外国人材が3割を占めています。ですが、日本の遠い地域で地震が起こっただけで関係ない県の労働者が帰国してしまうようなことが増えています。そのようにして帰国してしまったり、あるいは災害が発生したときに情報がなく逃げ遅れて亡くなってしまうようなことが起きると、企業は製造が止まってしまつて立ち行かなくなりますので、その点の対策が必要です。

辻岡 東京都町田市に拠点を置いているNPO法人「ゆどうふ」という団体で、ひきこもりの若者とご家族の支援活動を行っています。私たちの活動のひとつに「わらしべワーク

ろな気づきがありました。たとえば教師の研究をしていると、部活動などがあるので土日の勤務時間も質問項目に入れないわけですが、でも企業の研究をやっていると、「そもそも土日の勤務時間って何？」という話になるんですね。それが少し似ているなと思ったのと、もうひとつ、仕事が好きで働いている、好きで長時間労働をしている人たちにどう介入できるか、あるいはすべきかというのが僕らのプロジェクトで今すごく大きな問題になっています。

辻岡さんのプロジェクトだと、人によって見え方が違うというのは言われればすぐわかるんだけど、言われないと全然気づかない



●辻岡秀夫(つじおか・ひでお)

NPO法人「ゆどうふ」理事長。一般社団法人JYCフォーラム理事。臨床心理士。2021年度 国内助成プログラム「多様な若者が生き活きと社会参加できるまちづくり ―『わらしべワークプロジェクト』」代表者



● 中野祥子(なかの・さちこ)
山口大学教育・学生支援機構 留学生センター 講師。2023年度 特定課題
外国人材の受け入れと日本社会「外国人雇用企業への防災BCPの構築と
実践：「わかる」から「できる」に移行する異文化間心理教育を用いた防災
プランと研修開発」代表者

ポイントだなと思いました。でもそこが結構大事な気がしています。僕もバンドマンやいろいろな人にインタビューをする調査をしているので、こういうふうに見ているんだなと

気づくポイントはたくさんあります。それでもやはり一面的に見てしまっているところもあるだろうし、むしろそういう見え方をどう社会に伝えていくか、辻岡さんが最初にこの事業を起こされたときに、地域の人にどう説明していったのか。たぶん地域の人もその見え方の違いのところで何か衝突があったりとか、ずれが生じたようなことはなかったか

うかがってみたいです。

辻岡 初めのうちは、ひきこもりの人がこう

き」という言葉が並列していて、「働き」の方は「働き方」みたいな仕組みがあって、その上に個人の「働く」ということに対する向き合い方や心の部分も乗ってくるのかなと思うのですが、皆さんがプロジェクトを通じてやられているのは、働き方の仕組みや社会参加、コミュニケーションのところですね。働き方の仕組みの話と「働く」を分けた時に、社会の構造的な部分ともう少し個人にかかわる部分があるかと思うのですが、それがどんなバランスになつていったらいいか、もしくは日本社会はこういうところが足りていないといったようなことはありませんか。

野村 僕は、こちらの助成プロジェクトやバンドマンの研究とは別に、地域に残って暮らす若者に関する共同研究にもメンバーで入らせてもらっていて(日本学術振興会科学研究費助成事業 基盤研究(B)「産業構造の変容がトランジション経験に与える影響の地域差」、研究代表：知念渉)、そこで最近関心があるのは、仕事に自己実現を結びつける見方があるにも肥大化しすぎているのではないかとという点です。仕事に自己実現を求めるバンドマンの研究をしたり、教師でも仕事Ⅱやりがいいという見方ができるのですが、決してそういう人ばかりではないだろうと。

そうなたったときに、働くことをどう価値付けるかというのは大きなポイントになると思います。働くⅡ自己実現であり、やりがいとされている世界とは違う「働くこと」をどう社会が認めていくか、どう位置づけているのかはとても気になります。たぶん現実には

いう地域活動をやるのって大丈夫なの？という声は少なくなかったです。メディアでひきこもりの人が問題を起こしたというようなニュースがたくさん流れるので、バイアスがかかっていたんですね。そういう雰囲気があったなかで町内会でみんなで草むしりをするのがあったときに、ひきこもりの若者と一緒に行ったのですが、しばらくしてから町内会の人から「で、ひきこもりの人っていつ来るんだ？」と言われて、もう一緒にやっていますよと。想像とは違って普通の若者が来たので気づかなかったということですが、こうやって社会的認知を変えていく必要があるんだなというのは思いましたね。直接会って話していくと、その人にはわかってもらえるのですが、マスで広げていくとなるとやはり薄まってしまいますので、効果的にわかってもらう形があるのかなと思っています。

中野 好きで働いている人にどうアプローチするかというのはすごく共感するところがあります。私自身も職種を決める際、自分はおつちよこちよいでミスが多いタイプなので、たとえば病院や一般企業などで働いたらすごく時間がかかってしまったり、ミスをして大変なことになりそうと思ったときに、人の話を聞いたり、人のために時間を使うことが全然苦ではなくて、そういうことが好きかもしれないと気づき、それが生かせるのは教育だな

あるけれど、表舞台では語られていないような印象があります。

中野 どちらの気持ちもわかります。私は中小企業で働いている従業員の方向のカウンセリングをやっている、自己実現型の方たちは、自分が先輩になつたときには先輩にコーチングのような方法で指導していこうと思つている傾向が強いんです。そういう方々は「先輩には自分がどうなりたのかをまず設定させるところからやつていこうと思うんですよ」と言います。でもそういうときに思うのは、なりたい自分が仕事のなかで表現できない人だつていうことです。そういう人も無理にその目標と計画を作らされて、そこに向かつていかないといけない辛さは絶対にあるので、そういう人だつていこうことをまずはずは認めてください、と言わないといけない場面があります。

加えて、経営者の方々が社員の意欲向上のために「この仕事には社会的意義がある」「みんなが頑張れば多くの人の役に立つ」といったメッセージを伝える場面は少なくありません。一方で、現場では給与が低く生活が厳しい中で働いている人もいて、「みんなのためだから頑張ろう」と励まされることで、負担を抱えながら努力を続けてしまい、いわゆる「やりがい搾取」のように感じられる場合もあります。やりがいを強調されると、なかなか断りづらい面もあります。だって本来はいいことなのに断つたら悪い人みたいですからね。

仕事は仕事なんだという枠組みのなかで、自分がどれくらい熱を入れるか、それが伝

と思ったんです。

今思うと教師は何時間でも学生のことを考えるのが当たり前な職業だと思つていたということなのですが、それで誰からも怒られなし、迷惑ではないと思つていたからそれを選んだというところがあります。なので、教員は一定数そういう仕事だと思われているのも事実ですし、そういう人が選択して働いているであろうところも理解ができるなと思います。

好きでやっている人に対してどうするかというと、仕組み作りとして自由な選択肢が取れるように整備していくべきだと常に考えています。そのうえで自分の範囲のなかでやりたい人はやつて、それを周りがとやかく言わないような環境を準備するのも大事だと思います。仕事には常に人間関係が付きものです。

ありがちなのは、たとえば、職場の外国人のスタッフだけ生活の足しにとご厚意で会社からお米や飲食店のサービス券をもらえるけど、日本人のスタッフはもらえない。でも日本人だつてそんなに楽な生活ではないのに……、となります。外国人の子たちがほしいといったわけではなく、上の人が決めて配慮した結果、日本人スタッフに嫌われるのは外国人の子たちという、そういう影響を常に考慮して、働くことにおける平等とは何なのかを考えていく必要があると思つています。

働くことをどう価値づけるか

—— 本日の鼎談の趣旨の中に「働く」と「働

わつたらラッキーですが、伝わらなくても、なんだこいつとはと思わないこと。その冷静さが絶対に必要だということを伝えていきます。従業員に自分の志を共有するのはいいですが、押し付けてはいけません。ワークライフバランスは自分で決められるようにしたいというのが私の理想です。ライフの方を充実させようよと強要されても困るし、仕事を自分の成長につなげようよと強要されるのも困ります。自分のことは自分で決められる社会になるといいなと思います。

辻岡 ワークライフバランスでいうと、仕事とプライベートを対極に置いて考えることが人生の見え方を狭くしている気がしています。ワークはキャリア、人生と同じ意味の言葉だから、自分にとつてはプライベートも包含している。そういう視点で社会でのありかたが語られるようになっていいなと感じています。

私たちの支援現場でも、どんなふうになつていきたいのか、その結果どう自己実現したいのかを本人に聞きます。いきなり一番の難問を投げかけているなと思いますが、仕事に就くことよりも、続けていくことのほうが絶対難しいと思つているので、始めはどうなりたいたいということを描きつつ、仕事を続けるなかで思い通りにいかない現実との折り合いをつけていくことで、自分のあり方を現実落とし込むことができるかというのかなと思っています。

その過程がないと、自己実現した自分の理想像に対して、逆算して自分の人生に足りな

いものだけを考えるようになってしまいました。それは結局本人にとっても空虚感がありますし、そのようなマインドであれば、社会は彼(女)らにとってあまり魅力的に映らないだろうという気がしている。だから自分が描いたものを一歩ずつ現実には落とし込むような形が仕組み化するといいなと強く感じているところです。

働き方の多様性と選択の自由

中野 選択という点でいくと、ワークとライフがそんなにはつきり分かれるのかというのはすごく大事なポイントだと思います。働き方、働くことに対する向き合い方の選択可能性をどれくらい担保するかといったような話だと思うのですが、今ってそんなに選べますか？まず選べるという前提自体が少し偏っている感じもしています。

最近、戸惑う出来事がありました。私が立ち上げて担当していた業務が、私がその役割から離れた後、十分に引き継がれず、運営の形が大きく変わってしまったのです。その際、「あなたはワークライフの一部として取り組んでいたから実現できたことだけれど、他の人には同じようにはできない」といった趣旨のことを言われました。しかし、私がやっていることは全部仕事です。仕事をただ本当に一生懸命やっているというだけです。

仕事は自分の時間を使っているのであって、適当に時間を使いたくないから一生懸命やるのも当たり前で、時間を使うなら人の役

に立ちたい。そういうふうに生きていきたいと思っています。仕事だから一生懸命やるのは当たり前なのです。仕事だからこそやっているんです。だからプライベートで自発的にそのサービスを立ち上げるかといったら、やりません。でもそれが理解されないのですね。私がそう言うのと、なんで怒ってるの？っと、意外そうな顔をされました。仕事ですよと言っていることに、意外とドライなんですネとか言われて。

——NPOの世界でも一生懸命やっている人ほど、あの人はライフワークで好きでやっているから忙しくてもいいんじゃない？みたいな風潮はありますよね。でもそれは仕事としてやっていて、お金をもらっているからだというその冷静さも大事。逆に言うとお金をもらう対価分はきちっと仕事をするのは当たり前前責任だと思っています。

働き方の多様性とともに、個人の働くことへの多様性が表明しにくいし、わかりにくいがします。たとえばひきこもりの方だったからこの程度できたらいかなといったようなイメージで言われてしまう。でも人それぞれ違うので、もつとやりたい人もいれば、同じワークの量でも疲れる人はいるはずです。ですからワークもライフももう少し個人に紐づけて考えて語られるといいのかなと思います。

野村 先ほどお話をうかがっていて、働くことと結構地域性が出るのかなと思います。地域によって働くとか、働くことの意味

ら息苦しくしている原因かもしれません。新しい別の言葉が欲しいですね。

＊

——それでは最後に一言ずつお願いします。
中野 お二人からたくさん刺激をいただきました。辻岡さんのお話からは、人によって働くことはハードルが高いけど、まず目の前のことを続けて頑張ろうと思えたのがすごく励みになりました。それってひきこもりの支援だけではなくてみんなに共通することであるべきだと思います。



野村先生のご研究はアンケートやインタビューに協力してくださる皆さんの協力感がすごく、社会から求められている研究だなと感じたので、今後結果を追わせていただきます。

野村 辻岡さんのプロジェクトは事業自体にすごく興味が湧きました。できると思って社会に出る、でも挫折して戻ってきてまた社会に出る、そのように行きつ戻りつしながら少しずつ進んでいけるというのが特に興味深かったです。教師になろうと思っている学生たちには絶対に知っておいてほしいところです。

それから働くことのハードルの話はすごく大事だなと思っていました。これは教師ではなくてバンドマンの方ですが、ワークとライフ、バンドってどっち？という話をよくするんですよ。まだワークにはなっていないけど、ライフかというのと、「いや、俺のは趣味じゃない」となって位置づけてきません。そういうところでモヤモヤしていたので、もう少しレンジを広げて、さまざまな働き方を見つめていくことが大事だと改めて感じました。

また、ひきこもり、外国人など既存の固定観念や偏ったイメージでまなざされてしまうところも、働くというテーマにおいては事実と異なる印象を帯びてしまいがちです。既存の前提をまずしっかり疑っていくことが大事ですね。

中野先生のお話からは、働くということは関係性なんだなと強く思いました。誰かが入った・抜けたことによって働きやすさ・働

が変わってくるというか、地域が影響を与える部分がある気がします。たとえば、働いていないことは地方だと負い目があったり、風当たりが強かったり。国内の地域差もそうですし、国ごとに働くってどういうふうに捉えられているのか知りたいですね。

中野 マイノリティーへの視線については地域性が出るのかなと思います。うちの子どもが10か月になったタイミングが4月だったので、一歳になってないけれども保育園に入れる決断をしたところ、その保育園で私はすごく働いているお母さんというイメージになっていると感じました。0歳で預けて、出張でしょっちゅういなくなったり、遅くまで働いたりするお母さんというのは珍しかったのかもしれません。子どもが発熱したときに迎えに行き、授業を急に休講にできないので、抱えたまま講義をしたこともありました。そのときに、「さすがキャリアアウーマンだね」とかけられた言葉が褒め言葉には感じられないこともありました。

ときどき、働くって悪いことなのかな、たくさん働く＝愛情が少ないということではないのになと思います。仕事をいっぱいしているのはダメな人だ、子どもではなく他の人に愛情を流しているという感じにとらえられてしまつて辛かったです。だからワークライフバランスという言葉も罪な部分があるのではないのでしょうか。100を分けることが前提では両方が100にならないじゃないですか。本当は両方100があつていいはずですが。100を分けるという考え自体がもしかし

きにくさがガラツと変わることがあるというお声は、僕たちのインタビュでもたくさん耳にしました。辻岡さんの活動であれば誰がサポーターとしてつくかとか、どのような体制で全体をまとめていくかといったところでもあると思いますが、やはり人間関係はすごく大事な部分で、それが働く環境を規定している実感できたので、これは今後僕たちのプロジェクトの方でも引き受けて、論点にしていきたいなと思ったところです。

辻岡 お二人のお話は大変勉強になりました。中野先生のお話にあつたBCPの策定をしていくという中で、今後国や自治体が制度化するようなこともあるかもしれません。それはいいと思う一方で、そうなると現場の声が聞こえにくくなることもありそうです。ですのでこのタイミングで中野さんたちが現場でどういう声が上がっていて、何がやりづらいポイントかを把握しておくのはすごく重要だと思いました。

野村さんのお話は、私も不登校の子や親御さんの話を聞いていると、学校の先生が全然対応してくれないとよく聞きます。それで学校に行ってみると先生はもう仕事で手一杯で、この上新たな対応はお願いできないということは何度も経験しています。先生本人だけでなく、生徒や親もみんな困っているけれども手がつけられない現状がある。それに対して、実際起きていることの検証をしてくださっているというのが私としてもすごくありがたいですし、今後どうなるか聞きたいなと思いました。「働く」、面白いテーマでした。

私たちの取り組み

—— 助成対象者からの寄稿

今号は国際助成プログラムから東恵子さん、研究助成プログラムから下向依梨さん、国内助成プログラムから共同執筆として築瀬健二、尼野千絵、尼野三絵、馬崎慧さんにご寄稿いただきました。



日韓のダブルケア支援プロジェクトを通して

● 東恵子（一般社団法人ダブルケアサポート）

2023年度国際助成プログラム
「助成題目」日韓におけるケアラー支援・ダブルケアラー・ヤングケアラー支援とケアが豊かな地域社会ーケアリングデモクラシーへの学び合い

社会状況の変化と課題

2023年11月から2025年10月にかけて、私たちは日本と韓国の研究者・実践者が協働し、ダブルケアをめぐる課題と支援のあり方について深く学び合う2年間のプロジェクトを進めてきました。この取り組みは、2015年に実施した日韓ダブルケア支援プロジェクトから約10年を経て再び実現したものであり、当時と比べて社会状況が変化する中で、より多角的で深い学びにつながったと感じています。

前回のプロジェクトから現在までの約10年の間に、日本では内閣府によるダブルケア実態調査や、社会福祉法の改正による重層的支

援体制整備事業の開始など、制度的にもダブルケアが徐々に可視化されてきました。

また、各地でダブルケア支援の取り組みが立ち上がり、関心を寄せる人の輪も広がっています。しかし一方で、介護・子育て・障害・生活困窮などが縦割りの制度に分断され、多重ケアを担う人の状況を包括的に支える体制は依然として十分とは言えません。こうした課題の輪郭は、韓国でもほぼ同様に見られます。

韓国の家族センター、日本のこども家庭庁や子育て支援制度は、主に育児を中心とした家族支援を担っており、介護領域とは制度上分かれています。そのため、育児と介護が同時に押し寄せるダブルケア家庭においては、

三つの構造的課題

こうした制度的課題を再検討するにあたり、今回のプロジェクトでは、当事者インタビューを通じて、ダブルケアの現実をもう一度丁寧に見つめ直すことを重視しました。その中で浮かび上がったのは、大きく三つの構造的課題でした。第一に、ケアが社会的に評価されていないという現状です。家族による無償のケアは「当たり前」と見なされがちで、その負担や時間、精神的ストレスは十分に社会に理解されていません。

第二に、ケアの連鎖という問題です。子ど

もの頃に家族のケアを担いがちだった人が、大人になっても多重のケアを引き受けやすいという構造が見えました。

そして第三に、ケアを担うことによって、ケアラー自身が社会・経済・政治への参加が制限されるという問題です。ケアが必要な人に頼られ、その必要に応え続けることで、結果的に自らが社会の周縁に追いやられてしまう。これは日本でも韓国でも共通する深い課題でした。

2015年のプロジェクトでは、こうした構造問題の背景にある社会システムや価値観まで掘り下げる余力が十分ではありませんでした

な成果です。

制度間の連携不足が両国共通の大きな課題であることが明らかになりました。

介護分野では、日本ではケアマネージャーが家族も含めた支援を担うことが当たり前になりつつありますが、その制度的位置づけから、中心はどうしても「要介護者」であり、ケアラー支援を一人で担いきれない限界もあります。地域で当事者の声を拾い続けるには、多職種・多機関による支援体制の強化が不可欠であるという問題意識も共有されました。



横浜市西区にある地域子育て支援拠点スマイル・ボートの視察に韓国関係者が訪問(2025年2月)

さらに今回のプロジェクトでは、両国でそれぞれ特徴ある成果も生まれました。日本チームでは、全国のダブルケアラーの声を丁寧に集め、それをもとに政策提案書の作成に取り組みしました。一方、韓国チームは、学校や地域で活用できる啓発教材や動画の制作を意欲的に進め、メディアも活用しながら、ダブルケアという課題の周知・理解を広げる活動を力強く展開しました。

日韓ダブルケア支援共同宣言

こうした取り組みを踏まえ、私たちは今回の学び合いの集大成として、これから目指すべき方向性を示す「日韓ダブルケア支援共同宣言(案)」を作成しました。

この宣言案は2025年10月23日のシンポジウムにて発表し、参加者の意見も受けて、2026年2月のダブルケア月間に正式版として公表する予定です。共同宣言は一度きりの成果ではなく、今後の両国が継続的に協働していくための大切な基盤となるものです。私たちは、この宣言を礎に、毎年2月に開催されるダブルケア月間において交流を深め、取り組みを育てていきたいと考えています。

そして、私たちメンバー一人ひとりが、自分の現場や地域、研究の場で、今回の学びを実践へとつなげていくことが重要です。ケアが評価され、ケアを担う人が孤立せず、誰もが安心してケアし、ケアされる社会へ。その実現に向けて、私たちはこれからもそれぞれの場で、学びを行動につなげていきます。



上：韓国で行われた懇談会にて両国関係者による記念撮影(2024年11月)
右：「日韓ダブルケア支援共同宣言(案)」を発表したシンポジウム(2025年10月)





2023年度研究助成プログラム

「助成題目」子どもおよび地域社会のウェルビーイングの向上を実現するための、学校を中心とした「システムミックな変革方法」の確立

ウェルビーイングな学校と地域を育むために——SELを軸にした実践アプローチ

●下向依梨（株式会社 roku you）

株式会社 roku you は、「1人1人の生まれ持った可能性が磨かれ続け、有機的に響き合う豊かな社会を作ること」を目指し、SEL (Social Emotional Learning／社会性と情動の学び)のアプローチを軸に、これまで延べ120校と協働し、3万5000人以上の児童・生徒と関わってきました。

SELは「ソーシャルスキル」と「エモーショナルスキル」から構成され、自己理解力・自己管理能力・共感力・社会スキル・意思決定力という5つの能力を伸ばします。

「ウェルビーイングを実現する学校」の5つの要素

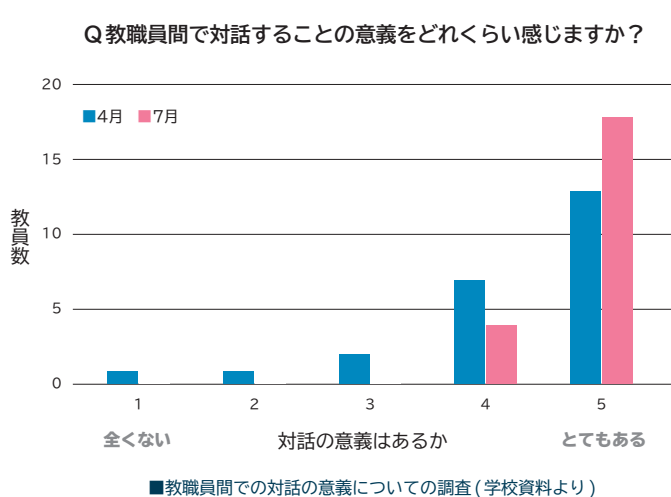
私たちはトヨタ財団2023年度研究助成プログラムを受け、「子どもおよび地域社会のウェルビーイングの向上を実現するための、学校を中心とした『システムミックな変革方法』の確立」の実証研究を進めてきました。対象は、沖縄県うるま市内4小中学校の小学校5年生く中学校3年生の985名。

本研究は、「(1)『ウェルビーイングを実現

が本研究の特徴です。

指標の測定方法として、東京学芸大学と『幸福感(Well-being)』を数値化・可視化する『ウェルビーイング指標』を作成し、うるま市の小中学校の先生・子どもへアンケートを実施、数値の変化を追いました。本稿では、特に変化が大きかったうるま市立天願小学校の事例をお伝えします。

天願小学校は、「異なる意見が出た時に、話し合うことが難しいと感じる児童がうるま市平均と比較すると多い」ことがわかりました。また、沖縄県は教員の精神疾患による休職が全国平均の2倍超の多さとなっています。天願小学校でも病休に入る教員が出ていまし



する学校』の要素と構造を明らかにする、(2)子どものウェルビーイングの向上を実現できる仕組みを学校と共に試行錯誤しながら確立する、(3)学校を中心とした子どもたちのウェルビーイングの向上の取り組みが、地域社会にどのようなインパクトを与えるのかを検証」という3つの柱で構成されています。

私たちは2024年から2年間にわたり、全国からウェルビーイングな学校づくりに取り組む実践者が集うカンファレンスを開催してきました。そこでの対話を分析することで、「(1)ウェルビーイングを実現する学校」の次の5つの要素を明らかにしていきました。

- ① 関係性の質：教員同士の対話の活発さや生徒と教員の信頼関係がある学校組織であること
- ② 生徒の主体性：自分の意見を言える雰囲気や挑戦が身近にあること
- ③ 教職員の自己変容：授業改善が自発的に行われ、教員自身がマイプロジェクト(探究)を進めていること。また、「こうあ

た。こうした課題を解決するために、「つながりを作る・教職員の同僚性を高める」「感情についての対話や学びの充実」を目標として掲げ、取り組みました。

学校の背景と目標を踏まえて、SELのアプローチを軸に対話の機会を創出するための年間計画を策定。たとえば、対話の中で話し手の感情やニーズに気づき、共感を育むワークである「エンパシーサークル」の実践や、コミュニティの土台となる決まりごとを対話の中で決定していく「グラウンドルール」の作成などの活動を行っていきます。

広がる、教員と子どもの変化

体系だった教員研修と教職員による対話の風土醸成により、多くの先生が「対話の意義」を実感していきました。その結果、年度途中の教職員の休職者数はゼロに。教員のストレスチェックによる「同僚からの支援」が、全国平均8.2ポイントに対し、天願小学校は平均10.4ポイントとなりました。さらに、「上司からの支援」についてもプラスの結果が見て取れました。

また、「特にやりたいことはない」と言っていた先生方から、次第にチャレンジしたいことが表明されるようになっていきました。研究2年目となる本年は、対話だけでなく、「対話×プロジェクト」を進めています。プロジェクトは、「子どもに委ねる学び」「特別支援」「ICT」など、各先生が取り組みたいテーマを掲げ、8つのグループに分かれて実践を重ねています。



■SELが養う5つの力(roku you作成)

るべき」より「どうありたいか」で語っていること

④学校の文化と風土…失敗が許容されることや対話と内省の文化があること。加えて、学校全体に一貫したビジョンがあることも風土醸成に貢献する

⑤学校と学校外との接続…①④は「学校内」についてであったのに対し、⑤は「学校外」の地域や保護者との接続、協働がなされていること

うるま市立天願小学校の事例

「ウェルビーイングを実現する学校」の構成要素を明らかにした上で、学校現場に伴走しながら、実際にその要素を構築していくこと

教員が変わることで児童にも変化が起きています。「不登校のうち登校復帰した児童生徒数」が、取り組みを始める前は0人だったのに対して、2024年度には15人となりました。また、年間で30日以上欠席した児童が不登校と定義されますが、その中でも、150日以上欠席していた子どもが、週1回程度の欠席にまで改善するなどの変化が見られました。

さらに、変革以前は保護者の授業参観や行事への参加は3割程度でしたが、2024年度は8割く9割程となったこともポイントです。これは「ウェルビーイングを実現する学校」の5つの要素の「⑤学校と学校外との接続」にあたるでしょう。

教育の現場に完璧な「完成」や「ゴール」はありません。現在も学校と共に試行錯誤を続けています。教育の現場に完璧な「完成」や「ゴール」はありません。現在も学校と共に試行錯誤を続けています。教育の現場に完璧な「完成」や「ゴール」はありません。現在も学校と共に試行錯誤を続けています。



また、学校に伴走している教育委員会や地域のプレイヤークの方々にもこの研究結果を活用いただきたいと思います。



人と人の新たな繋がりが、これからの自治を支えていく

共同執筆 ● 築瀬健二、尼野千絵、尼野三絵、馬崎慧
(NPO法人暮らしづくりネットワーク北芝)

「ゆる自治」とは

本プロジェクト地域である「北芝」という名称は町名ではなく、住民たちから親しまれてきた愛称である。北芝は被差別部落であり、自治会などの一般的な地縁組織以外にも「部落解放同盟北芝支部」という運動団体や「NPO法人暮らしづくりネットワーク北芝」という中間支援組織などが存在する。それらの団体が住民主体の地域活動をバックアップし子どもから高齢者まで幅広い層を対象とした活動が展開されてきたことで、住民同士の豊かな繋がりが色濃く育まれてきた。

一方で近年地域の様相は大きく変化してきている。地下鉄延伸により新駅が近隣の大型商業施設直結で誕生した。それに伴いバス路線も変更され、北芝は新たな人流のポイントとなっている。地縁を持たない新規流入層が増え、住んでいなくても遊びに、働きに、学びに来る人など、顔なじみがない人たちが、それぞれ繋がりもなく分散している状況

である。

そこで本プロジェクトで目指したのは「ゆる自治」である。地域自治に関わるアクターのバリエーションをこれまでの長期定住を前提としたものから、住んでいるかどうか関係なく何らかのかたちでこの地域に関わる人たちにまで広げる。そしてそれぞれが自分の興味関心があるものに自分の都合の良いタイミングや役割で関われるような緩やかなグラデーションをもった参加の在り方を担保する。多様なアクターの多様なテーマ性が地縁型コミュニティと融合することで地域が活性化されることを目指した。

「ホップステップかんぱい！プロジェクト」

地域内外の人たちが交流できるような仕掛けとして、芝生広場「芝楽」を使って【かんぱいマーケット】というイベントを毎月開催した。飲食店を営業している人や革細工の小物を制作している人たちに出店を呼びかけ、毎回5〜6店舗程のこじんまりしたイベントだ

り来場者に振舞った。夏の盆踊りの日には子育て支援団体と協働で、未就学児向けに玩具がたくさん入ったでっかい氷を作りプレーパークを開催した。子どもたちはみんな玩具よりも氷を溶かすことに夢中だったが、その中に盆踊りで使える飲食チケツトを混ぜていたことで、遊んで帰るだけでなく地域の盆踊りにも参加してもらうことができた。

また建築専門学校の学生たちが廃材を用い、互いが協力して座らないと安定しない「不安定ベンチ」を制作してくれた。それ以外にも出店者さんたちによる餃子作りや革細工の小物作りのワークショップなど、バラエティに富んだ盛り沢山の内容が実施された。

これらの企画は毎月【いっちょかミーティング】という会議のなかで練られていった。地域にある古民家をつかって開催し、みんな

で晩ご飯を食べながら飲みながら話し合った。ビールの試飲会やBBQ、秋には七輪で秋刀魚を焼いたり冬は鍋を囲んだりなど、企画について話すことと同じくらい、何を食べるかが大事であり、みんなは仕事や学校終わりに寄って会食を楽しんでいた。この会議の場自体が「ゆる自治」に繋がる交流の場として機能していた。

かんぱいマーケットやいっちょかミーティングの周知や報告は、【ジッチーノ通信】という広報誌を二月に1回作成し地域内に全戸配布した。手に取った人が身近に感じてもらえるよう、みんなに顔なじみがありそうな人として校区内小中学校の校長先生からヤクルトの訪問販売員さんなどにも取材し記事にした。リレーコラムは、いっちょかミーティングの中で、あみだくじによって選ばれた人に

が、時々ま住民さんが即席でホットプレートを持ち出してチヂミを売り出すなど自由な雰囲気の間であった。通りがかった人や併設されている弁当屋のお客さんがふらっと立ち寄ったり、向かいの公園に遊びに来た家族連れがお昼ご飯を食べに来たりして、このイベントが地域を知ってもらうきっかけとなっていた。

来場者がもう一歩深く活動に関わる仕掛けのひとつとして、地域でホップを育てて醸造するクラフトビールの制作を企画として取り入れた。ホップのプランターを出店者の店舗や住民宅などで栽培し、イベント内ではそのネーミング案やラベルデザインを来場者から募集した。また地域として能登の震災支援に継続的に関わっていたこともあり、被災地でもホップを育ててもらった。そうして出来上がったクラフトビールは、ネーミング投票の結果、ビールの味と応援の意味をかけて「エールエール！」に決定した。イベント内では子どもたちが遊び相手になってくれる大人と公園に遊びに行き、親たちはカンパイしながらゆったりとした時間を過ごせた。

またイベント内ではさまざまな催し物も企画された。地域の消防団に協力してもらい消防車と子ども用消防服を借りての写真撮影会は、特に未就学の子どもたちに大人気で新規流入層の親子も訪れた。

夏は夕方からビアガーデンを開催し、暑気払いを兼ねたストレス解消企画としてモヤモヤしていることを紙に書いて燃やすコーナーでは、せっかくなのでその炎でパエリアを作

「ゆる自治」のこれから

多様なテーマを気軽に持ち込める枠組みを作ることで「ゆる自治」を目指したが、特に出店者たちはイベント以外にも地域拠点を使得って期間限定店舗を出店したり、能登の復興支援として現地での炊き出しと一緒にいたりなど、枠組みに留まらない展開を見せた。こちらが企画していない場面で活動が展開し、人と人が新たに繋がっていく姿がこれからの自治を支える土壌になっていくと感じた。

「ゆる自治」は言い方が違うだけで、これまでさまざまな人権課題に接続し多様な人たちを包摂し発展してきた北芝のまちづくりの在り方のいわば焼き直しである。ただそのようなまちづくりがアフターコロナ以降の地域自治において一つの先駆的事例となり得るのかもしれない。

本文を書きながら、文字では表現しきれない場の緩やかな雰囲気や面白いできごとを、北芝を知らない人たちにどう発信するかを今は検討していきたいと思う。ただ、接触が制限されたコロナ禍があけたからこそ、オフラインでの密な繋がりを大事にしていきたいとも思い、北芝にぜひ足を運んでほしい。



共有から育まれる未来

「研究助成×先端技術の中間報告会・合同ワークショップ
2025」開催報告

● 寺田 俊(プログラムオフィサー)

トヨタ財団では助成事業の一環として、助成対象者同士の交流や研究成果を社会へ還元する機会づくりに取り組んでいます。

2025年10月18日、研究助成プログラムと特定課題「先端技術と共創する新たな人間社会」の合同で、中間報告会・ワークショップを開催し、これまでの助成対象者や有識者など約50名の参加者が集まりました。当日の会場には、分野や立場を超えて学び合い、新たな協働の芽を見出そうとする期待が広がっ

域の異なる参加者の意見を丁寧に橋渡ししながら議論を深めました。

最初に中澤末美子氏(山形大学学術研究院)より、「社会のリソースとしての研究——『裏側』をみせることの意味」と題し、大学や学校現場での臨床心理に携わる自身の経験を踏まえ、労働の場で生じる悩みやコミュニケーションの困難が、個人だけの問題ではなく社会の構造と深く結びついていることを指摘しました。

また、論文や数値化された成果といった「メロンパンの力りカリした部分」だけでなく、そこに至るまでの迷いや葛藤、現場での対話の積み重ねといった「ふわふわの部分」こそ社会に開いていく必要があると述べ、研究の背景にあるプロセスや悩みといった「裏側」を開いていくことの意義を説かれました。

これに対し、コメンテーターの平田末季氏(北海道大学高等教育推進機構国際教育研究部)は、研究者が自身の経験や葛藤を言語化し、一般化すること自体が重要な社会還元になると述べました。

また、國吉康夫氏(先端技術選考委員長、東京大学大学院情報理工学系研究科)は、研究者が対象に深く関わりながらも倫理性を保つ「抵抗的実践」の科学的意義に触れ、研究者が現場の一員としてもがきながら、新しい方法論やオープンサイエンスのあり方を切り拓いていく重要性を指摘しました。

続いて、大澤博隆氏(慶應義塾大学理工学部)より、「人工知能と虚構の科学…AIによる未来社会の想像力拡張」と題し、SFプロ

ていました。

第1部：中間報告会(ポスター発表)

第1部では、初めての試みとなるポスター形式によるプロジェクトの中間報告発表を実施しました。

プロジェクトの背景や問題意識、これまでの成果だけでなく、試行錯誤のプロセスや悩みも含めて「現在地」を共有していたくことをねらいとしました。不安もありましたが、開始直後からポスターの前では助成対象者同士や有識者との活発な意見交換が自発的に始まり、会場の空気が追いつかないほどの盛り上がりでした。

参加者からは「共通の悩みが共有できた」「助言や励ましを通じて仲間意識が芽生えた」といった声が寄せられ、交流の場として大きな成果が見られました。研究の進捗報告にとどまらず、今後のコラボレーションの可能性や、新たな実践のアイデアがその場で生まれていく場となりました。

第2部：ワークショップ 「社会にはたらきかける研究とは」

第2部では、「学術性を保ちながら、どのように研究は社会とのつながり、研究成果を社会に還元していけるのか」という問いを掲げ、助成対象者2名による話題提供と、コメンテーターからのコメント、フロアを交えたディスカッションを行いました。

司会は、佐倉統氏(研究助成選考委員長、実践女子大学人間社会学部)が務め、専門領

トタイピングを活用した研究実践を紹介しました。SFが持つフィクションとしての力を応用し、企業や自治体、市民とともに「少し先の未来」の物語を描くことで、従来の延長線上にはない価値観の転換や、新しい未来像の創出を促すこと、またフィクションを媒介にすることで立場の違いを超えて対話しやすくなる点を示しました。

これに対し、コメンテーターの赤坂文弥氏(国立研究開発法人産業技術総合研究所)は、SFには「思考の枠を外す力」があり、あえて現実離れた未来像を描くことで、多様な人々が新しい視点を生むと評価しました。

研究成果を論文として発表するだけでなく、その背景にあるプロセスや葛藤を「開く」ことや、対話を続けることの重要性和その是非について、活発な意見交換がなされました。

本ワークショップの様子は、トヨタ財団YouTubeチャンネルにて公開しています。ぜひご視聴ください。

トヨタ財団 YouTube
チャンネル
www.youtube.com/c/
thetoyotafoundation



参加者による記念撮影



懇親会の様子



第2部：ワークショップ



第1部：中間報告会

想像力で未来をひらく

「アート×SF×AIによる地域未来共創ワークショップ
秋バージョン」に参加して

◎ 寺崎陽子(プログラムオフィサー)

「SFプロトタイピング」という言葉をご存知でしょうか。未来をサイエンス・フィクションとして描き、その実現に向けてバックキャストイング的に物語を組み立てていく(プロトタイプしてゆく)手法で、SFという自由で創造力に富んだ方法を用いてイノベーションを生み出そうとするアプローチとして注目されています。実際、さまざまな企業が新しい製品やサービスの開発に向けて、SFプロトタイピングを取り入れつつあるそうです。

また、ワークショップは、前半の「アート(ベネッセアートサイト直島対話型鑑賞)」と後半の「SFプロトタイピング」の2つのパートで構成されていました。

まず前半では、福武財団エデュケーターのファシリテーションでアート作品を鑑賞し、アート作品を通して浮かぶ言葉を各自タブレットに入力していきましました。私たちのグループは、最初にヤニス・クネリスの「無題」(1996年)を鑑賞したのですが、驚いたことに、その作品から得る印象が見事にみんなバラバラでした。食べ物に関連する人がいれば、薪割りを想起する人、さらには人生を思い浮かべる人もいました。多様性とはこうした「隠れたところ」にも常に存在しているのだと、改めて実感しました。

私は「壁の断面」にも見えると思ったのですが、それをエデュケーターに伝えると「何の壁ですか?」との問いがかえってきました。「家かな……」と答えると、そこから次々と問いが続きます。「どんな家ですか?」「人は住んでいますか?」「どんな人が住んでいますか?」「家で使っていたモノは含まれていますか?」「それはどんな時に使っていましたか?」「どんな経緯で壁の断面に入れたのですか?」などなど。そして、不思議なことに、エデュケーターの問いに答えているうちに、単なる「壁の断面」と思っていたものから、ある家族の物語が立ち上がってくるようでした。「ベネッセアートサイト直島対話型鑑賞」によって膨らむ想像に、これまで非常にもったいない芸術鑑賞をしていたかもしれない

今回私が邪魔したのは、そうした未来を構想する「SFプロトタイピング」という手法にAIを掛け合わせた研究プロジェクト——「人工知能と虚構の科学」・AIによる未来社会の想像力拡張(2023年度先端技術と共創する新たな人間社会、代表…大澤博隆)——による実験的なワークショップです。「アート×SF×AIによる地域未来共創ワークショップ」というタイトルのもと、「瀬戸内のアートな島の20年後の未来を考える」をテーマに掲げていました。

「アート×SF×AI」で未来を想像するのはどのような展開になるのか期待が高まりますが、この研究プロジェクトは生成AIによる創作活動への影響が飛躍的に強まるなかで「虚構の科学」を提唱し、フィクションとAIの可能性を探るなかで人とAIとが共創する未来について議論しています。その試みについて、ワークショップへの参加報告から少しご紹介できればと思います。

ベネッセアートサイト直島対話型鑑賞

2025年11月2日フェリーに乗ってワークショップ会場である「ベネッセハウスミュージアム」に向かいました。海外からの観光客も多く、世界から注目される小さな島の熱気を肌で感じるようになりました。さて、ミュージアムで行われたワークショップでは、参加者が6名ずつ2つのグループに分かれ、まずは軽い自己紹介から始まりました。会社員や大学院生、島の住民の方など様々なバックグラウンドの方々が集まっていま

と、悔やまれる思いがしました。

SFプロトタイピングに挑戦

後半では、研究者のガイドのもとグループでSFプロトタイピングに挑戦しました。テーマは先ほども述べた通り、「瀬戸内のアートな島の20年後の未来」です。前半でアート作品を通して紡ぎ出したさまざまな言葉を組み合わせながら、瀬戸内の島の未来について想像を膨らませます。しかし、これが意外にも難しく感じられました。SFだからこそ許される自由な発想をしたいと思っても、頭が固くなってしまうのか、既存の枠組みから外れた言葉選びやストーリー展開になかなか結びつきません。そんなとき、現在の私たちにはAIがあります。ただし、それはAIに頼るということではないと感じました。なぜなら、今回の実験的なワークショップでの体験が非常に豊かな思考実践に感じられたからです。技術は人の能力を引き出してくれるものでもあると思います。それはAIを用いた創造性においても言えることではないでしょうか。参加者たちでSFのプロトタイプを作ることは困難に感じられましたが、楽しい作業でもありました。AIはその楽しさを倍増させるツールとして、私たちに想像を広げるヒントをくれるもののように思いました。

AIと人々が「共創」するとはどういうことなのか——SFとAIによって創造性が拡張していくことを体験し、困難な時代を切り開くイノベーションの可能性を少し垣間見たような気がしました。



参加者による記念撮影



参加者による記念撮影



ワークショップの風景



ぐるぐる



直島の風景

022年4月、トヨタ財団のご支援のもと、「人間と人工主体の共存のあるべき姿」をテーマにした学際的なプロジェクトを開始しました。プロジェクトの狙いは、今後の人工知能（AI）技術の発展を見すえて、人工物が「主体」となる可能性と、そこから生じる社会的・倫理的な課題を予見的に検討することでした。しかし、技術の進歩の速度は、私たちの予想の遙か上を走りました。

プロジェクト開始から数か月後の夏、テキストから精緻な画像を生成するAIが次々と現れ、同年11月にはChatGPTが登場。そこから数年でAIは日常生活のいたるところで用いられるようになり、人間社会とAI技術の関係は一変しました。それに伴い——これはプロジェクトで想定した通りでしたが——ある哲学的な問いが世間の注目を集めるようになりました。「AIはいつか人間のように心を持つのか」という問いです。

かつてはSFの世界にあったこの問いが、今や現実的な可能性として語られるようになりました。多くの人がこの哲学的な問いに関心を寄せるようになった状況を、私は哲学研究者として嬉しく思う一方で、一抹のいらだちにも似た歯痒さも覚えていました。「心とは何か」という根本的な問題について十分な省察がなされないまま、世の中ではSF的な未来への期待と不安ばかりが先走りしているように感じられたからです。

なぜ「AIはいつか心を持つ」と期待されるのでしょうか。その裏側には、「人間の心は脳というハードウェアで動くソフトウェア（コン

越えるのを防ぐために体を投げ出すのでしょうか。単に「白線を越えたら相手ボールになる」と頭で理解しているからではありません。日々、その競技を鍛錬してきた結果、白線はもはや考えるまでもなく特別な「境界線」に感じられ、選手の身体を突き動かすのです。学生時代、ラグビーという競技に打ち込んでいた私は、頭での理解とは異なる身体的な「知」の経験を見事に言語化した、メルロ＝ポンティのこの分析に衝撃を受けました。これを学ばずに大学を出るわけにはいかないと大学院に進学しました。

その後、このメルロ＝ポンティの思想を認知科学の領域に融合する「エナクティヴィズム」という考え方に出会い、今でもそれをテーマに研究を続けています。エナクティヴィズムの視点は、身体と世界の交流から心が作り出されるありさまを解き明かします。たとえば、かけがえのない身体があるからこそ、私たちは「食べ物」や「寝床」の意味をただ認識するのではなく、その生きた意味を経験できる。さらに、他者との関わりの中で形成される社会的な身体をもつからこそ、生命維持に必要なものだけでなく、人間社会が作り出した「白線」や「言葉」にさえ、深い意味が感じられるのだ、と。

メルロ＝ポンティやエナクティヴィズムの視点から捉えると、AIは自動車の運転、アートの制作、流暢な会話など、従来は人間にしかできなかつたさまざまな活動をこなせるようになりつつあるものの、身体をもたない点で人間と決定的に違っています。AI制御システムにロボットのボディを与えたり、大規模言語モデルに身体に関する膨大な知識を習得させたりする

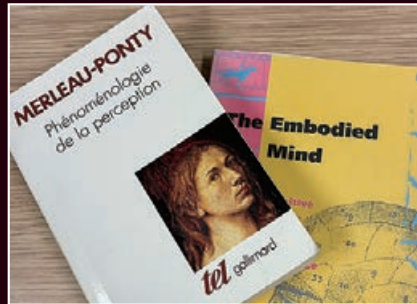
「私」のまなざし 44

身体性から見る人間とAIの相違点

写真・文◎宮原克典
北海道大学



2022年8月にStable diffusion（テキストから画像を生成するAI）を使って、自分の名前（Katsunori Miyahara）をプロンプトに生成した画像



メルロ＝ポンティ『知覚の現象学』とヴァレラ、トンブソン、ロッシュ『身体化された心』



2025年3月、人工主体の哲学・倫理学の第一人者David Gunkel教授と、LOVOT MUSEUM（東京都中央区）を訪問



2025年10月、サイエンス・カフェ札幌「AI時代、どうしたい？「人とモノの狭間のなにか」を哲学する」に登壇

ピュータプログラム）のようなものだ」という考え方が潜んでいます。実際、そうでなければ、AIに心を宿らせることは、単に技術的に困難だけでなく、そもそもの可能性としてありえないはずです。このように心をコンピュータになぞらえる見方は「心の計算理論」と呼ばれ、AIを含む認知科学の発展を20世紀半ばの黎明期から現在に至るまで支えてきました。

この見方が正しいとすると、そこから広がる可能性は無限大です。ロボットに心を宿らせることも、自分の心をコンピュータにアップロードすることも、原理的には可能だということになります。思考や感情といった捉えどころのない現象が、実はプログラムにしたがった情報処理でしかないという「真実」には、全ての悩みを吹き飛ばしてくれるような魅力すらあります。しかし、本当に人間の心はコンピュータプログラムなのでしょうか。たまたま人間においては脳で動くけれども、原理的には半導体集積回路にも実装できるような現象なのでしょうか。

私

自身の研究の出発点は、人間の心をコンピュータとして捉え直す、この現代的な発想への根本的な違和感でした。この違和感に言葉を与えてくれたのは、20世紀フランスの現象学者モーリス・メルロ＝ポンティです。

メルロ＝ポンティは、意識や心を個人の内面的な領域として捉える伝統的な哲学に異を唱え、それらが世界と関係を結ぶ身体に根ざしていることを説いた「身体性」の哲学者として知られています。

たとえば、なぜ球技の選手はボールが白線を

ことはできるでしょう。しかし、それはかけがえのない生きた身体をもつことと同じではありません。将来、生きた身体を人工的に作り出せるようになる可能性はあるにしても、現在のAIシステムには、世界の生きた意味を経験するための根本的な基盤が欠けています。

人

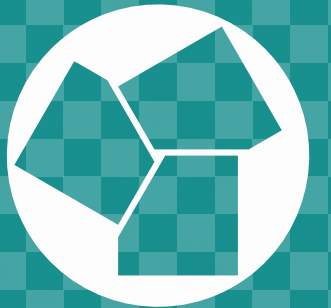
工主体との共存」プロジェクトを実施した3年間、大規模言語モデルを基盤にしたAI技術は世間の熱狂を伴いながら発達を続けました。その中で、あえて心の身体性を強調する言説は、お世辞にも広い支持を集めているとは言えない状況が続いています。

しかし、どれほどAI技術が進歩しようとも、それと関わる私たちが「身体を通じて世界の生きた意味を経験する存在」であることに変わりはありません。さらに言えば、昨今は「AIエージェント」や「超知能」の到来も盛んに議論されていますが、AI技術がいくら進歩しようとも、それはあくまで人間が世界との身体的な関係の中で生み出した技術であり、身体をもった人間に取って代わることできるような存在ではありません。

このある意味では極めて常識的だけれども、ややもすれば見落とされがちな人間活動における身体性の意義に光を当て続けるのが、研究者としての私の役割だと思っています。

◎宮原克典（みやはら・かつのり）

2021年度特定課題「先端技術と共創する新たな人間社会」助成対象者。助成題目「人間と人工主体の共存のあるべき姿を学際的に問うための新たな枠組み『人工主体学』の構築に向けて」



REPORT

カイケツNext【入門編】
in 北海道

2 016年度に開始した「トヨタNPO カレツジ『カイケツ』」は、NPOを対象に「代表者に仕事が集まる」「業務効率が悪い」など、事業実施や組織運営において発生する問題を解決していく力を身に付けていくために、トヨタ自動車(株)で長年にわたって取り組まれてきている「問題解決手法」を学ぶ連続講座として6期にわたり実施してき

的に考える機会となりました。

当日は助成対象者をはじめ、企業、大学、公的機関、NGO等で実務や研究に携わる50名以上が参加し、温かい雰囲気の中にも活発な議論が交わされました。

基 調講演では、選考委員長を務めてこられた園田茂人先生より、選考を通じて見てきた日本社会の課題についてお話しいただきました。前半の事例発表では、多文化を生かす地域づくり、情報アクセス格差の是正、健康支援体制の整備など、多様なテーマが紹介されました。それぞれ限られた時間での報告となりましたが、質疑応答では幅広い視点から意見が寄せられ、「子ども」「日本語」「人権」など個別の論点にとどまらず、外国人をめぐる社会全体を見渡す視座の重要性があらためて共有されました。

後半は、高度人材の国内定着、日本企業の海外事業から得られる学び、東南アジアにおける移住経験共有の取り組みなど、国際的な視野を踏まえた報告が続きました。いずれの発表からも、現場の知見と研究の成果を行き来しながら課題に向き合うことの大切さが浮き彫りになりました。

終 了後には懇親会、翌日午前には助成プロジェクトメンバー限定の情報交換会も開催しました。本助成プログラムでは、研究と実践のあいだに存在する情報・経験のギャップを埋め、双方の学びを深めていくことも目指しています。今回の集まりが、参加者のみなさまの実践や研究をさらに豊かにするきっかけとなれば幸いです。

ました。

一方で、経年により受講団体の組織像やニーズの変化などが徐々に生じ、同時に事務局側にも新たな問題意識が芽生えてきたことから、7期目の実施は見送り、2023年度に今後に向けた検証の機会を設けました。そして、その結果を踏まえて、2025年度より「カイケツNext」としてリニューアルし、大きく以下の2点の改変を行いました。

- ①「中間支援組織」を対象に実施
- ②「入門編」と「アドバンス編」の2つのコース体系に変更

※2つのコースの具体的な紹介や開催レポートなどはトヨタ財団のウェブサイトを「参照ください」(今年度内に公開予定)。

今

回は、2025年11月28日(土)、29日(日)に北海道で開催した【入門編】の様子を簡単にご紹介したいと思います。従来の「カイケツ」は「問題解決手法」の8ステップを約半年間かけて座学での学びと自団体に持ち帰っての実践という連続講座で実施していました。



【入門編】は2日間の開催として、初日に「問題解決」の考え方や本質を主眼にいた全体講義と「分析手法」に関する演習を行

い、2日目は「テーマ選定」の演習と締め括りとして各参加者から発表をいただきました。

参加者の皆さんはほぼ全員が初見となり、また限られた時間内で膨大な情報量でもあったため負荷も大きかったと思いますが、講師への質疑や演習でのディスカッションなどからは非常に熱量や意欲の高さが窺えました。

今年度の【入門編】は2月に東京開催も控えており、次年度以降も2地域での開催を予定していますので、ご関心ある中間支援の方々のご参加を心よりお待ちしております。



招待制シンポジウム「外国人材の受け入れと日本社会の変化」を開催しました

2 025年11月19日(水)午後、特定課題「外国人材の受け入れと日本社会」に関する招待制シンポジウムを野村コンファレンスプラザ新宿にて開催しました。本助成プログラムは2019年度の開始以来、約40のプロジェクトを支援しており、今回のシンポジウムでは、その成果を振り返りつつ、今後の日本社会における外国人受け入れの姿を多角

PUBLICATIONS

移動する子どもたちのことばの教育



2 022年度国際助成プログラムの助成対象プロジェクト『日本と出身国を往来する移民の子どもたちの社会再統合を見据えた言語教育——母語・公用語の補習教室を地域の「多文化共生」の拠点に』(代表者：田中雅子、D22-N-001)の成果物として、「移動する子どもたちのことばの教育——多様なアクターによる母語・継承語教育の現在と未来」(明石書店)が出版されました。

本書では、日本で暮らす外国ルーツの子どもたちの言語使用や母語の意義を言語権などの観点から再考し、研究者・教育関係者・移民コミュニティの協働による現場での実践報告や国際規範の検討などを通じて、真の「多文化共生」への道筋を示しています。

移動する子どもたちのことばの教育——多様なアクターによる母語・継承語教育の現在と未来

● 出版社：明石書店
● 著者名：田中雅子・坂本光代編著

INFORMATION

JOINT(ジョイント)50号発行！

本 誌、広報誌「JOINT」は、トヨタ財団の活動や考えをより多くの方々にお伝えすることを目的として年3回発行し、2009年7月の創刊号以来、約17年をかけて今号で50号の発行に至りました。

リーマン・ショック直後からはじまり、公益法人制度改革にとまなうトヨタ財団の公益財団法人化、東日本大震災をはじめとする自然災害の多発、新型コロナウイルスの感染症の世界的大流行などさまざまな社会変化がありました。そうした中で助成対象者のみなさまの活動は、これまで以上に社会を支える礎としてなくてはならないものとなりました。

「JOINT」では今後もそのような助成対象者のみなさまの活動を紹介しつつ、広報活動を通じてよりよい社会の一助となるべく務めてまいります。

トヨタ財団ウェブサイト
toyotafound.or.jp





いただいた「TAKA」は馬だけではなくライオンもあります。[Y.N.]

【編集後記】

EDITOR'S NOTE

● いよいよ2026年が始まりました。

今年は、サッカーフリーグの私にとってとても重要な年。そうです、4年に一度のサッカーW杯イヤーです。日本代表は目標のベスト8を達成できるのか、今からドキドキ、ワクワクが止まりません。

私がサッカーを始めたのは高校生の時で、その時は、こんなにサッカーにのめりこみ、自分の人生に影響を与えるものになるとは思っていませんでした。そもそもサッカー部に入ったのも仲の良い友人に引つ張り込まれたからで、「好き」というほどではありませんでしたが、そこであるコーチとの出会いをきっかけに私はサッカーの魅力に憑りつかれます。その方の練習はとても厳しいものでしたが、サッカーを語るときは本当に楽しいものな顔をする方で、「もっとサッカーを楽しめ！」が口癖でした。ですが、教えていただいたのはサッカーの楽しさだけではありません。

その方に言われたことで今でも心に残っているのが「苦しい時に、苦しい顔をするな！」という言葉です。試合中、リードされて苦しい時に苦しい顔をしていると、どんどん苦しくなる、そういう時こそ前を向け、ということで社会人になって仕事がいよいよ時はいつもこの言葉を思い出していました。もっとも、このコーチにやらされた夏

合宿の練習以上に苦しい経験をその後の人生ですることはありませんでしたが……。

ということ、今年の6月、いよいよ至福の時がやってきます。毎日仕事そっちのけで試合観戦に夢中になっているかもしれないませんが、その時は、財団の皆様、なにとぞご容赦を。[N.K.]

● ● ● 今号は本誌JOINTの50号目にあたります。創刊が2009年ですから、ほぼ17年近くの月日が経過したことになりますが、この間の人々の生活及び社会の激しい変動ぶりには驚くべきものがあります。いうまでもなく、トヨタ財団そして広報誌としての本誌もその社会の変化と無縁ではいられません。形態が大きく変わることはなくとも、そのコンテンツ(中身)は社会の動きに対応して変えるべきは変えるのが、変えてはならないその目的を堅持するためには必要です。

変えてはならない目的とは、財団の設立主旨にある「人間のより一層の幸福をめざす」という一言に尽きるでしょう。哲学者アリストテレスは幸福とは「善く生きる」ことだと言っていますが、このデジタル・テクノロジーの時代に、たとえばA-

を活用しつつも、この根本的な言葉の意味をわたしたち個人の一人ひとりが問いかけ、自分の頭で考え、全身で感じ取っていくことが大切です。

広報誌JOINTも「言葉」を通じてその問いかけの一端にでも貢献できるメディアの一つであることを願っています。[I.I.]

● ● ● ● 気がつけば50号目という感覚ですが、創刊当時はスマートフォンが一般的ではなかったことを思うと、単に時間の流れだけでなく社会自体の変化の速さにも驚きます。本誌に登場される方々は、そういった社会の変化のさらに先を見据えて活動されており、毎号々々制作しながら多くのことを学ばせていただいています。[K.S.]

● ● ● ● おかげさまで本誌JOINTが50号を迎えました。私はプログラム部から異動になり広報を担当することになりましたが、プログラム部時代の知識が役立つこともあって両方経験できることをありがたく感じています。本年は助成対象者の皆様にこれまで以上に協力いただく新しい試みもしていきたいと考えています。[Y.N.]

FOR THE SAKE OF GREATER HUMAN HAPPINESS



本誌送付先の変更等がありましたら、右のQRコードを読み取ってお知らせください。



JOINT [ジョイント] No.50

発行日 2026年1月27日
発行人 山本晃宏
編集 トヨタ財団 広報グループ

発行所 公益財団法人 トヨタ財団
〒163-0437東京都新宿区西新宿2-1-1
新宿三井ビル37階
[TEL] 03-3344-1701
[FAX] 03-3342-6911
[URL] <https://www.toyotafound.or.jp/>

編集協力 石井 泉
デザイン エディション・ヌース
印刷 文唱堂印刷

本誌掲載の記事、写真、イラスト等の無断転載を禁じます。

On The Journey

—旅の途上で—

2025年8月、助成プロジェクトメンバーとインド・ニルギリ丘陵を訪問。旅を振り返りながら、除去された外来種の材で作られた野生動物のフイギュアに色を塗り、思い思いのメッセージを入れました。● 写真撮影：笹川みちる





公益財団法人

トヨタ財団

THE TOYOTA FOUNDATION



公益財団法人トヨタ財団ウェブサイト
<https://www.toyotafound.or.jp/>



UD
FONT



ミックス
責任ある水産資源を
使用した紙
FSC® C003980